

橫濱高等商業學校二十年史

序

本校は關東大震災火災の灰燼の裡に、その復興の魁として、大正十三年横濱市に創設された。爾來、世界的經濟不況の深化の間に、その搖籃期を迎へた。出發點からこの一大試煉に對して、學園は却て不撓の氣魄を養ひ、和衷協同、克く荆棘の道を拓き、内容を充實して向上の一途を辿り、光輝ある學園の礎石を築くことが出来た。この間に育成した三千の有爲なる人材は、「信賴の人」として、社會に優秀なる成果を擧げ、國家への奉仕に全力を盡して歇まざるあるのは洵に欣快の至りである。

創立してより今や二十周年を迎へんとす。學園の悠久性より觀れば二十年は短日月であるが、人生に譬へれば適齡期に達したといへよう。二十年の氣魄に満ちたる傳統を基として、研學に教育に邁進すべき時期を迎へたのである。況や、國家が總力を擧げて大東亞建設の聖

一

二

戰を遂行する秋、一刻の儉安も許されず、日々清新の氣魄を以て愈々本分に恪循し、教育の使命完遂に挺身せねばならない。徒らに馬齡を加へる如きは宥さるべくもない。沈滯は學園の汚辱である。

二十年の過去を回想し、之を修纂して學園の事歴を略敘したる所以は、徒らに自慰低徊に耽るためではない。自己反省のためであり、將來の向上に資せんがためである。

昭和十八年四月十五日

横濱高等商業學校長

田

尻

常

雄

例 言

創立二十周年記念式を十八年五月に舉げることと決定した時、田尻校長から「創立二十年史」の編纂が提案され、一月八日に次の十氏が三十年史編纂委員を委嘱された。下田禮佐、不二門龍親、徳増榮太郎、小幡孫二、井上龜三、森田優三、越村信三郎、井手文雄の八教授、齋藤照之助主事、高林義雄書記。これ等の委員にそれぞれ分掌してゐる事務資料を整理して提供して貰ひ、徳増がこれを整理勘案して編纂することとした。さうして編纂の方法を提示して、一、總記 二、沿革 三、學友會記 四、同窓會記 五、回想録に五大別し、更に沿革を創立から十周年までと十周年から二十周年までに區分し、この區分の下に各委員は資料を整理執筆して二月二十日頃までに資料が提供された。徳増はこの資料に據つて、獨りで二十年史を執筆することとした。といふのは提供された資料を單に集成編纂しただけでは重複やら形の相違やらがあつて、いかにも寄せ集めたといふ感じを與へると思つたことと、幸にも私は高商學報を第一號から所藏してゐたので、その學報の記事から過去折々の空氣を嗅ぎ得ることとの理由で、提供資料を據り所とし、之に學報記事を参照しながら獨りで執筆すれば一つの纏つた二十年史が出来ると思つたからである。さうして三月一日執筆を始めて、四月三日に大體脱稿した。その間、學年末で在宅日に恵まれたから、文字通りこの仕事に没頭した。獨りで執筆したことは資料の單なる寄せ集めとい

二

ふ難からは救はれてゐると思ふが、それだけに徳増一個の觀方や習癖が出てゐるやを惧れる。とにかく文責は徳増一個にある點をここにお断りしておく。

學友會記は、學報から注目すべき記事を抽出收録した。この方法が多少學友會の足跡を傳へ得ると思つたからである。同窓會記は越村教授の執筆をその儘收載した。

なほ各委員が提供された資料のほか参照した資料を念の爲め申添へておかう。

横濱高等商業學校一覽 大正十四年以降

教授要目 昭和五年以降

庶務課日誌 大正十三、十四、十五年度分

開校式、十周年記念式關係書類綴

高商學報 第一號（昭和二年六月三十日付）より第百三十六號（昭和十八年三月十五日付）まで

（編纂委員 徳増謙）

横濱高等商業學校二十年史

目次

序	一
例言	一
總記	一
本校教育の信條	一八
本校の校風	三
國家的行事と學園	四
沿革前篇	六
第一 創立記	九—二五
創立事情	二—二二
創立の年	二—二八

第二 創業時代より開校十周年まで (大正末期より昭和九年まで)	三—二五
------------------------------------	------

一 教育組織	三—三〇
學科課程	三—三三
學年、學期	三—三三
訓育の方針	三—三三
二 創業の完成	三〇—三三
全學年完成	三〇—三三
施設漸次整ふ	三—三三
三 研究調査機關	三—三三
研究所、調査部創設	三—三三
研究所季報發刊	三—三三
商學會の設立と「商學」の發行	三—三三
外部研究團體	三—三三
四 夜學部附設	三—三三

夜學部の目的	六〇
講習會の經過	六二
五 開校式	六三
開校式祝賀日程	六四
開校祝賀式典	六五
開校記念祭プログラム	六六
横濱文化史料展覽會	六七
開校記念論文集刊行	六八
開校式當時の概況	六九
六 學友會の活動	七〇
文化團體	七一
運動部	七二
横濱高商新聞發刊	七三
その頃の學友會	七四
七 貿易別科新設	七五

貿易別科創設の事由	七六
南米に横濱高商村建設の意氣	七七
八 開校五周年（昭和四年）前後	七八
教官の動靜	七九
應召出征の職員生徒	八〇
野外教練と査閲	八一
校歌成る	八二
開校五周年記念祭	八三
消費組合設置	八四
對高工野球定期戰の復活	八五
九 就職狀況	八六
不況の深化	八七
就職難時代	八八
財界好轉と就職狀況	八九
十 思想問題とその對策	九〇

不況と思想問題	八三
思想對策	八三
社會教育へ進出	八四
十一 開校十周年記念式	八七—二五
開校十周年の回顧	八七
十周年記念行事日程	八八
記念式典	八九
十年勤績者表彰式	八九
慰靈祭	九〇
記念行事	九〇
記念事業	九一
開校十周年當時(昭和九年十月)の概況	九六
沿革後篇	一〇一—一四四
第三 開校十周年以降二十周年まで	一〇一—一四四
(昭和十年より十八年五月まで)	一〇一—一四四

一 日本の大轉換期と教育の新方向	一一九—一二四
自由經濟より拘束經濟へ	一二九
歐化思想を棄て皇國精神の確立	一二三
教育界の新體制	一二三
二 學園新體制	一二四—一二四
國體明徴	一二四
勤勞報國團の結成	一二六
集團勤勞作業	一二七
興亞青年勤勞報國隊參加	一二八
勤勞作業資料	一二九
三 報國團結成と報國隊編成	一三〇—一三一
自治的學友會の解消	一三〇
報國團結成	一三一
消費組合より生活部購買班へ	一三一
報國隊編成	一三一

勤勞協力令と報國隊	一五二
國防體制の強化	一五二
教育の統括	一五三—一五九
日本文化昂揚施設	一五三
學校視察の實行	一五三
教育の統制	一五三
専門學校令の改正	一五三
學科課程の改革	一五三—一五七
學制改革	一五三
第二次學科課程の改正	一五三
新學科課程	一五三
卒業期繰上對策	一五三
研究施設	一五三—一六一
ゼミナール	一五三
英語教授上の一特色	一五三

圖書館	一六二
紀元二千六百年記念文庫	一六二
調査部	一六二
太平洋貿易研究所	一六二
研究團體	一六二
公民講座	一六二
商品實驗室と商品陳列所	一六二
教練と體育	一六二—一六九
學校教練の重視	一六二
體育に出色	一六二
入學試験と就職狀況	一六二—一六九
入學試験	一六二
就職狀況	一六二
教職員十年間の動靜	一六二—一六九
田尻校長の榮譽	一六二

教官の動靜	三六
物故教官	三二
十 支那事變、大東亞戰爭と學園	二三一—二三五
應召卒業生と戰歿者	二三二
記念行事	二三四
十一 學友會 報國團	二三五—二三八
學友會より報國團へ	二三六
鍛鍊部	二三九
文化部	三四〇
十二 生活調査	三四一—三四四
十三 寄宿寮	三四五—三四七
十四 開校二十周年時代の概況	三四八—三四九
學友會(報國團)記	三四一—三四〇

同窓會(富丘會)記	三五一—三五四
回想錄	三五五—三五六

附 表

教官擔當科目異動表	三
生徒主事異動表	一七
年 表	一八
十五年以上勤続者	三七